

全学フォーラム：奈良女子大学における教養教育の再構築のために

第3回の報告

奈良女子大学における教養教育の再構築に向けた全学フォーラムの第3回目が7月31日に開催されました。第1回は日本の大学が置かれた大状況、第2回は本学の学生の履修状況調査を踏まえて議論しましたが、第3回はさらに焦点を絞って、センターから出されている「改革試案」に即して具体的な改革の可能性を模索しました。今回はどなたかにスピーカーをお願いするのではなく、あらかじめ全学で30名ほどの方から改革試案にコメントをいただき、それをご紹介することを議論の端緒としました。以下では事前にいただいたコメントを整理した当日のレジュメを再録した上で、フォーラムで出されたご意見を要約して報告させていただきます。

なお、教育システム研究開発センターでは、教育計画室と連携して教養教育改革の具体案の検討を継続しています。さしあたり次年度から実行可能な部分については、追ってニューズレターでご報告する予定です。

Ⅰ 基本方針について

「いたずらにコンセプトを縮小せずに、外向けに奈良女をアピールするチャンスと見て、改革のインパクトを重視してほしい。」(文・人間)

「大学の宣伝になるような教養教育の企画を。」(理・物理)

「従来の「教養」復権にとらわれない議論が評価できる。」(文・言語)

(1) あらためて「教養」とは何か、について

「教養とは何か、という根本的な問いが希薄ではないか。」(文・人文)

「基本方針は「何のため」が重要で、それを全面的に打ち出すべきではないか。」(文・言語)

「教養教育の目的が不明なので、議論そのものが不毛である。」(理・化学)

「何のための教養教育かについて、大学の方針を全教員が共有すべき。」(生・健康)

「私たちは、よりよい社会を実現し、個々の人間がよりよく生きるために学ぶ。学ぶことの使命についての意識が必要。そこに大学教育の使命もある。」(文・人間)

「学ぶ意味や学ぼうとする意欲を自ら創り出す学習活動が問われている。その意味で、改革試案の基本方針は中等教育のあり方をも問い直すものである。」(附属中等)

「中教審答申と改革案との関係も考えておく必要がある。」(理・数学)

「文科省の言う「学士力」の内容の精査も必要である。」(文・人文)

(2) コンセンサスの困難

「異なる学部・専門の間で、どれだけヴィジョンを共有できるのかが不安。」(文・言語)

「はたして問題意識の共有がはかれるか。」(文・人間)

「多くの教員は当事者意識がない。この議論そのものが、そのきっかけになればよい。」(文・言語)

(3) 実行可能性について

「アイデアはよいが、実行可能かどうか疑問。」(理・物理)

「問題は、教員にそれを実現する意欲と余裕があるか。」(理・数学)

「必要な非常勤卒などを確保できるのか。」(文・人文)

「教養教育というカテゴリーの廃止に伴う混乱をどれだけ排除できるのかが問題。」(生・健康)

「鍵はコーディネーションだろう。」(生・生活)(理・物理)(附属中等)

「コーディネーションのためのコーディネーションにならないか。」(理・生物)

「限られた人的資源で、どのような具体例があり得るのか検討を。」(理・物理)

「具体例がないと考えにくい。」(附属中等)

(4) リベラルアーツとしての教養教育、専門基礎教育としての教養教育？

「〈専門教育を通じた教養教育〉と専門教育との違いがわかりにくい。」(理・数学)

「リベラルアーツと専門基礎教育との区別が必要。」(附属中等)

「高校理科と先端科学とのギャップはますます拡大しており、科学教育の立場からは、スムーズに研究教育に導入できるような理数系の基礎教育が必要。」(理・化学)

「専門教育(特に初級)の内容・目的を「知識伝達」から「学習法」「思考法」へシフトさせることが必要。」(理・生物)

「『専門教育を通じて教養教育を』という、専門をわかりやすく、と考えがちだが、大切なのは考える手助けをすること。」(文・言語)

「不要な教養教育科目を廃止して、専門課程のために十分な時間と基礎科目を確保すべきである。」(生・食物)

「学生はすぐにでも専門教育を受けたいと感じている。専門とは距離のある教養教育科目を履修する効果が疑問。」(理・化学)

「(概論をリベラルアーツ該当科目とする際に)専門に進む学生のための専門教育としてのレベルは担保されねばならない。」(文・人文)

「学問には「専門家」から見たら「教養」とされてきた他分野の知識の本質的活用が必要。ただ、その際に何が必要な「教養」となるのかは、あらかじめ決定できない。」(文・人文)

II 具体策について

「是非思い切った改革を。15コマ受け身で話を聞いてテストを受ける、という形は廃止を。」(文・言語)

「それぞれ相当なエネルギーが必要だが、実施できればよい結果につながる。」(理・数学)

「AとBは現行とさほど変わらない。大変かもしれないが、改革というなら、CとDを実施すべき。」(文・言語)

「現場からの希望・実現可能性を探ってほしい。学科によって個別の事情を勘案してほしい。特定の教員に負担が偏らないように。」(理・生物)

「BやCは、どの学科・コースにも適切な案なのかが疑問。専門を意識した教養科目を。学科・コースの

意向を反映してほしい。」(生・食物)

「ジェンダーの視点も重要である。」(文・言語)

A 「教養」の実体視や「専門教育」との階層化から離れた「リベラルアーツ」

「現実的な方策だと思う。」(理・数学)

「コンセプトはよい。しかし、従来の専門科目をそのままリベラルアーツ科目としては使えない。十分な検討と意志統一が必要。「学び直しの機会」も視野に入れて科目新設を検討してもよい。」(理・生物)

「専門の概論がそのままリベラルアーツになるかは疑問。専門基礎と一般向けの内容はおのずと別。」(文・言語)

「コンセプトはよいが、実現には多くの困難が予想される。概論科目を開放すると、専門性を下げざるを得なくなり、専門の学生の学力が伸ばせない。」(文・人文)

「教養科目というカテゴリーを廃止して、専門以外に触れる機会が保障できるのか。」(理・物理)

「コンセプトは素晴らしいが、奈良女生に合っているかは疑問。カリキュラムの魅力で学生を惹きつけることができればいいが。」(文・言語)

「リベラルアーツを全学年にわたって履修させる仕組みが難しい。履修単位に上限を設けるのか。上回生時にとる科目はモチベーションが低下するのでは。」(文・人文)

「A、C、Dのコンセプトは妥当だが、具体案としては別の策がある。アラカルト方式をやめて、提供科目を大幅に減らし、1科目の履修者数を許容限度まで確保し、教員の負担を軽減しなければならない。また、Aは学問の体系性という視点から検討されるべき。C、Dもそれと連動する。①高等教育を受けた市民としての使命のもとに学ぶことの意味を考える。②高校までの学習を思い出す。③それを学術体系に合わせて体系化する。以上が必要。」(文・人間)

「受講者100人以上の双方向が難しい授業をリベラルアーツと位置づけられるか。」(附属中等)

「少ない資源を活用するためには、目標を明確にした教養科目の配置を。ただし目標設定は専門によって千差万別だろう。」(理・化学)

「賛成。第2外国語と体育はいらない。不要な講義は思い切って廃止を。専門に必要な基礎知識の教育のために時間と予算の確保を。」(生・食物)

「外国語と体育の位置づけが不明。他大学での弾力的扱いを参考に。」(生・健康)

「外国語の位置づけについては保留。」(文・言語)

「語学科目については、少人数でよりタフな授業を。ベーシックなクラスと、もう少し専門性をもたせたクラスと分けることも必要か。」(文・言語)

B 専門教育に即して徹底的に教養教育を行う奈良女子大学

「1回生が専門の論文を読むのは難しい。」(理・数学)

「専門や興味関心が確定しない中での論文の精読は困難。先進的な論文についての解説の方が現実的。」(文・人間)

「物理学科の展開科目で同様な試みがある。ただし3、4回生向けであり、これを1、2回生でやるのは困難。どれくらい「専門的」な論文ができるかは、分野によって差がある。」(理・物理)

「学術の体系性という視点から反対。体系性を知らないで専門を学ぶことはできない。」(文・人間)

「理系では展開科目で論文精読を取り入れている。」(理・物理)

「生物学科では2回生以上で既に実施。既存のプログラムの調査と調整が必要。」(理・生物)

「文学部の基礎演習など、既にある注目すべき試みを全学に広げたらよい。」(文・言語)

「既にある成功例（文学部の基礎演習）などとの兼ね合いが問題になる。」（文・人間）

「コンセプトはよい。要約する力は重要。ただし、既に開講されている「基礎演習」などとの棲み分けは、論文選定の方法には工夫が必要。」（文・人文）

「リテラシー演習は、可能であれば複数の履修を。文学部の基礎演習に近いが、現在の半期1コマでは不十分。」（文・人文）

「このようなトレーニングは不可欠だが、これらの演習に特化した教員が実施すべき。学問的な深さよりもテクニックに集中した方が効果的。また論文の書き方、議論の仕方までも含めて。」（文・言語）

「コンセプトはよい。さらに情報の収集・分析、発表や質疑の能力も。また英語も必要。」（理・生物）

「自ら学ぶことを希求し、自ら文献を読む必要に気づかせる授業を。内容や進め方を第三者の立場から見るとオブザーバー教員、あるいはチームティーチングも必要では。」（文・言語）

「コンセプトはよいが、教員の負担が大きい。」（生・健康）

「どのような内容をどれだけ揃えられるかにかかっている。」（附属中等）

「専門に関する論文を精読してレポートを書くトレーニングは教養ではないのでは。」（生・健康）

「要約レポートは単なるトレーニングではなく、学生の主体的な表現と捉えることが必要。」（附属中等）

「リテラシーのとらえ方が問題。スキルの類の個別のリテラシーの大本にある基層的リテラシーをどのように捉えるのか。その観点から議論を深める必要がある。」（附属中等）

C 本学の豊富な人材と研究実績を活かした有機的なコラボレーション科目

「よさそうだが、具体的に想像できない。」（文・言語）（理・数学）

「コラボレーション科目は単なるオムニバスとどう違うか。」（文・人文）（理・物理）

「参加する教員が全ての回に関わるぐらいでないと単なるオムニバスと変わらない。そこまで強い意識を作ることは難しい。」（生・生活）

「単なるオムニバスになることを危惧する。科目数を絞って少しずつ更新を。永続的な責任母体が必要。各種センターによる企画運営は如何。」（理・生物）

「有機的連携が可能な分野は多くないのではないか。どのような連携が可能か調査を。時限開講については、担当教員の負担軽減をした上で継続した方がよい。」（理・物理）

「成功例を紹介して、拡張を。オムニバスは形だけになる可能性が高い。」（文・人間）

「実現すれば素晴らしいが、コーディネーターは難しい。綿密な準備が必要。」（文・人文）

「コーディネーターの力量に負うところが大きい。担当者の視野の広さも問題。」（附属中等）

「少なくとも1年は準備期間をとり、その期間も担当者の負担軽減を。」（文・人文）

「1回生向けの講義はオムニバスが望ましい。ただ、有機的連携というと、友好的なグループ内でしか維持されず、一つの方向性に持っていくものになるのでは。」（生・健康）

「オムニバスで各回の講師が自分の研究の非常に専門的な内容を熱っぽく語る「ちんぷんかんぷん講座～教員はみんなオタクだった～」といったアイデアがある。」（文・人文）

D 「リベラルアーツ」のカリキュラムデザインを議論し、実施に責任をもつ仕組み

「責任を持つ組織の立ち上げには賛成。」（理・物理）

「組織は必要だが、5年程度の長い担当期間の方がよいのでは。」（文・言語）

「担当組織は必要。ある程度長期的に、かつ部局に優越する権限をもった「室」レベルで。」（理・生物）

「総論賛成・各論反対となる議論を取りまとめる権限を持てるかどうかが鍵。」(附属中等)

「企画運営主体を構築するというスタンスはとてもよい。授業担当も、主にそのスタッフがやるのか。」(文・人文)

「相応の人事(テニュアのポスト)で人材を獲得する必要がある。」(生・健康)

「組織は重要。軌道に乗るまでは、もう少し継続した任期も必要。いずれにしても担当教育の負担が一番の問題。」(文・人間)

「中心となる教員の負担軽減が不可欠。」(文・人文)

「担当教員の負担軽減は大事だが、そのような能力をもった教員が専門の授業を担当しないことによる専門教育の質の低下も心配。」(理・数学)

「新組織メンバーの専門教育の負担軽減が可能か。専門学科の少人数教育が本学の専門教育の特徴だから。」(生・生活)

「当該機関の構成員の負担は大きい。いっそ教養科目のカリキュラムデザインを学科・コースに任せて、調整機関だけにしたら。」(生・食物)

(以上、当日のレジュメより)

フォーラムで出されたご意見

■ 教養教育改革の「核」の共有

「大学がどういう人を育てるかをまず提示して、それに対して何ができるのかを議論する必要がある。」

「うちの大学はこうです」という核となるものだけは全員が共有していないと困るのではないか。」

「奈良女は、教養ある専門家を育てる。専門か教養かという二者択一にしないための方途を考えなければならない。」

■ リベラルアーツ該当科目の設定について

「リベラルアーツ該当科目を設定するには、①専門基礎としての教養科目②専門の学問を他分野との関係性を見据えて深めていくための教養科目③他分野から見た場合に教養科目となりうる各学問分野の専門基礎、という三層から教養を再考する必要がある。」

「教養を実体視せず機能と考える」といっても、リベラルアーツ該当科目をそのように機能させる仕掛けが必要ではないか。」

「各専門分野の基礎的な部分が、多様な領域に属する人にとってどういう意味を持つのかを捉え直さなければならない。」

■ 各専門分野と教養との関わり

「教養は全学共通ではない。専門基礎教育とリベラルアーツの違いだけでなく、教養教育と全学共通教育との違いも考える必要があるのではないか」

「将来他分野と交流するには、「専門こそが教養」という考え方もできる。専門的な考え方を鍛えてから社会に開く目をもつためには、教養を3、4回生で履修する必要があるのでは。」

「各学問分野において、専門教育が垂直方向に積み上げられ、深められていくものであるとすると、教養教育は、その専門性を水平方向に開いていくものではないか。」

■ 教養とは何か

「教養とは何か」という議論を欠いたまま、コンセンサスがとりやすいところで議論しているのではないか。」

「三学部が持つ異なる学問観を、中和するだけではなく、徹底的に議論してみることも面白いのでは。」
 「学問を選択する際の男女間のバリアを超えられるような教育を考えて行くことが本学の課題。幼稚園から大学院まで、すべての課程が研究対象になる。特に、女性の理系への進学促進を考えたい。この場合、専門選択に必要なことを学ぶ過程が教養教育となる。」
 「中学入学時の生徒がすでに理系文系の意識をもっている現状には疑問がある。問いを発する力や方法、そして、その問いを追求する力は、理系文系に関係なく大切である。」
 「大学に入って最初に出会うもののハードルの高さが、学生が専門を選ぶインセンティブになるのではないか。難しいことは本人にとって未知であるから、「これを勉強しなさい」という大学からのメッセージが必要。」
 「教員と学生が共通の言語を持つためにグレイトブックスの選定を考えたが、教員側の枠組みを押し付けてしまう可能性がある。」

■ シティズンシップと教養

「専門の基礎教育は必要だが、教養が専門のためにあると考えてはならない。基本的に教養はシティズンシップを得るための科目。」
 「学術間でも、よりよい社会をつくり、よりよい市民になるための体系があるので、学術として体系化された教養教育課程が必要。」
 「キャリア教育も、単に就職の手段ではなく、学生が働くことの意義を考え、自分を社会に開いていくことを見越してなされるなら教養教育になる。」
 「教養は社会人であるための方法なので、社会に開かれてないと意味がない。」
 「自ら学び続けられるよき市民を育てるとしたら、どういう資質や能力が必要なのかをはっきりさせた上で、必要な教養科目を考えて行くべきではないか。」
 「奈良女は社会科学系がない大学なので、この方面が手薄であることを常に意識しておかなければいけない。」
 「シティズンシップの観点から教養を考えるならば、リベラルアーツ該当科目の履修選択を学生に委ねてしまっているのか。」

■ 「書くこと」と教養

「書かれている内容を正確に理解して、もう一度自分の言葉で表現することは、どのような専門に進んでも必要なこと。」
 「新しい市民社会を引っ張っていけるような女性リーダーには、多くの人の意見を聞き、それを集約し一つの思想にまとめあげて伝達する力が求められている。これを具体化するためのトレーニングを、スキル養成としてでもやる必要がある。」
 「レポートを書くトレーニングは専門教育としてやっている。精読してレポートを書くことは教養ではないのでは。」
 「文学部の基礎演習では、卒論を書くまでの4年間で半年に凝縮してやっているのだから、「大学リテラシー演習」という科目名はそぐわない。」

(以上)

■ 奈良女子大学教育システム研究開発センターニュースレター 32 ■

2013年10月31日発行

奈良女子大学教育システム研究開発センター

住所：〒630-8506 奈良市北魚屋東町

奈良女子大学コラボレーションセンター 204

TEL：0742-20-3352

Website：http://www.nara-wu.ac.jp/crades/

mail：crades@cc.nara-wu.ac.jp

